

黒 澤 幸 三
くろ さわ こう ぞう

学位の種類 文 学 博 士
学位記番号 文 第 29 号
学位授与年月日 昭和 5 1 年 2 月 2 6 日
学位授与の要件 学位規則第 5 条第 2 項該当

学位論文題目 日本古代の伝承文学の研究

論文審査委員 (主査)
教授 北 住 敏 夫 教授 佐 藤 喜代治
教授 石 田 一 良

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、第一章「伝承文学研究の立場と方法」、第二章「氏族伝承」、第三章「仏教説話」—『日本霊異記』について—、第四章「寺社と説話」、第五章「古代伝承文学の意義」から成り立っている。

第一章は自分がこれらの研究を進めた立場と方法について述べている。古代文学の特色は制作者が個人でなく複数であること、口から耳へと伝えられる口承性の強いこと、文学が生活の中に機能し生活に即して創造されること、素朴で単純な表現が集団的な場を背景にしてなされているなど、中世・近世・近代にはない特色を持っている。これらの特色を一語で云うなら伝承性の濃い文学と云えよう。ここにおいては「氏族伝承」という観点からは『古事記』・『日本書紀』・『風土記』その他の作品が研究の対象になり、「仏教説話」のところでは主として『霊異記』がとりあげられ、「寺社と説話」においては『霊異記』以降の中世説話が古代との関連のもとに考察されている。最後の「古代伝承文学の意義」は三輪山伝説を中心に据えて、古代伝承文学の諸問題を論じ、あわせてその文学的意義に論及している。今までこのような伝承性の強い文学や、在地性とのかかわりの濃い神話・伝説・昔話・説話などの研究に関しては柳田国男氏・折口信夫氏の業績がすぐれていたと云えよう。しかし本研究においてはこの両先学の見解に対しては多少

批判的である。すなわち両先学に対して私は摂取し、批判するという立場に立って論を進めている。

第二章の「氏族伝承」は古代氏族である息長氏・ワニ氏・三輪氏・小子部氏の伝承をとりあげ成立や文学としての特色を論じた。四世紀に大和朝廷が形成された頃、各先進地には有力部族が蟠踞していた。それらが大和朝廷より一定の姓を賜与され、一氏族として認定されたのは五世紀段階と思われる。私は文学の始源をこの氏族の発生と並行させて考えている。それ故、わが国の文学の発生は大和朝廷の形成以前に考えるのはむずかしいであろう。私が氏族伝承の研究を志したのは、日本文学の始源を解明したかったこと（特に韻文学よりは散文文学の始源）、各氏族の伝承を検討すれば、自然に天皇家（天皇氏）の伝承も判明し、究極的には『記紀』の性格も明らかにできると思ったからである。氏族伝承の研究は第一に『記紀』その他の作品の中から当該氏族の関係伝承を摘出することから始まる。第二にはその氏族の大和朝廷下での職掌や位置を問題としている。第三に摘出された伝承を綿密に解釈しようとしている。古代文学の研究においては解釈と評論が並行されなくてはならぬだろう。解釈にあたっては特に宣長・契沖等の業績を参照とした。第四に解釈し理解した各伝承の文学性を問題としている。その際も伝承の定着時期を常に考慮した。文学性の解明には制作者の立場や方法とともにその作品がいかなる時代の所産であるかが大事である。ここでとりあげた伝承は多く大化前代のものである。大化前代の文学の研究にはこの氏族伝承の研究が必須のものと思われる。

「息長氏の系譜と伝承」は近江坂田郡を本貫とした地方氏族息長氏の消長と『古事記』形成の問題を論じた。その方法は従来国文学の分野からは無視されていた『古事記』の系譜を批判的に操作して息長氏の全容解明、『古事記』との関連の究明に進んだ。その結果、息長氏はオキナガタラシヒメ（神功皇后）伝承・ヤマトタケル伝承・衣通郎女の歌物語の制作に参画していることを説き、あわせて伝承や歌物語の文学性に論及している。『古事記』・『日本書紀』は一時に成立したものでなく何回にもわたる成立の段階を持ち、しかもその都度一氏族が持ちかかっていた伝承が、『記紀』またはその前身の「帝紀」・「旧辞」に挿入される場合が多い。しかも『記紀』の中心は天皇家の伝承である。その天皇家の伝承を軸として中央・地方の諸氏族の伝承をそのおりに集合させたものの総体としての『記紀』。—このような『記紀』に対する私の見方、また私の一連の氏族伝承の研究はこの論文にはじまる。

「ワニ氏の伝承」は六篇の論文からなる。私は十数年来奈良市に住み、奈良市と天理市の境にある天理市榎本町和爾というところに興味を持ちだした。ここは柿本人麻呂出生の地である。それで人麻呂研究のためにも柿本氏の本宗にあたるワニ氏と、『古事記』に多くあるワニ氏の伝承の研究に立ち向った。(1)「氏名の由来」は序論で、古代日本語のスキ・サヒ・ワニが同義語であることに着目して、ワニ氏の氏名が水棲動物のワニに由来していること、並びにワニ氏がその昔、

ワニの住むインドネシア方面より潮流のままにこの列島へ渡来してきたことを論じた。(2)「日子国夫玖の出陣」は、継体天皇とワニ氏の娘ハエヒメとの婚姻を手がかりに、ワニ氏による継体天皇の擁立を明らかにし、その擁立のための内乱に基づいて「崇神記」の日子国夫玖伝承がワニ氏により作製されていることを論証した。つづいて「帝紀」・「旧辞」が継体朝を起点として作られ始めていること。現『古事記』に対して継体朝の「旧辞」が天皇の権威に毒されることが少なく、稚拙ながらも豊かな文学的所産であることを力説している。(3)の「建振熊の活躍」は「仲哀記」所載のものだが、本文にみえる快調な繰り返しや対句的表現から推して、この伝承は本来ワニ氏の語部に語られていたが、同じく「帝紀」・「旧辞」編纂の際・「旧辞」の中におさめられたこと、「旧辞」の文学とは連帯感に支えられた透明な世界であることを指摘した。特に敵将が死に際して歌う歌は氏族制という紐帯に支えられている人間の剛直さ晴朗さをよくあらわしている。(4)「応神天皇と矢河枝比売」は「応神記」の有名な歌謡「この蟹や何処くの蟹百伝ふ角鹿の蟹……」の考察である。この歌の下地として敦賀の海人の乞食者の歌があること、「角鹿の蟹」とは継体天皇の守護神敦賀の気比神宮の神使いであること、この歌が継体天皇の宮——山城の筒城の宮にて公表されたらしいこと、従ってワニ氏の娘ハエヒメの継体天皇への興入れが契機になって、応神天皇と矢河枝比売の聖婚譚が創作されていること、あわせてこの都会的であてやかな物語歌の性格を論じている。(5)「大山守と宇遅能和紀郎子」は前篇に直接続く、ワニ氏作製の歌物語で、この物語に寸劇的性格のあること、「ちはやひと宇治の渡りに渡り瀬に……」の歌が他の物語中の物語歌であったこと、この宇治の渡りを舞台とした歌物語は、近くの筒城の宮。それもハエヒメの後宮にて発表されたらしいこと。従ってこの物語や歌にみられる洗練された叙述や構成は発表の場としての後宮（ここにはワニ氏のハエヒメがいた）の性格とも関連があることに説きおよんでいる。(6)「結び——ワニ氏と歌謡」は、ワニ氏の伝承が合戦を叙述してもすぐ歌と結びついて歌物語を形成し、なかなか英雄叙事詩になりにくいこと。継体天皇の筒城の宮には大陸から文人が招聘され、ここにて「帝紀」・「旧辞」の編纂が開始されたこと、ワニ氏は山城川（木津川）の水上交通を掌握して継体天皇を筒城の宮にて擁立したこと、かくてワニ氏と『古事記』の関係は、継体朝の段階で生じたこと。六世紀はじめの継体朝とは文運勃興の時代であったことなどを論じている。

「三輪氏の古伝承」は方法的には「息長氏の系譜と伝承」を深めたものである。大和の雄族三輪氏は大和朝廷とは別個に一氏族の伝承として、系譜・神話・歌謡・歌物語を残した。その系譜を検討すると、三輪氏は同族とされている賀茂氏・出雲氏とも違う大和の在地性の強い氏族であることがわかる。この氏族の伝承を特色づけているのは三輪山を中心とした大物主神の祭祀で、世に名高い三輪の神話（三輪山伝説）は族長が大物主と活玉依毘売（巫女）との聖なる子であることを語っている。古来三輪山周辺には巫女が多く、その巫女の存在は「雄略紀」の記事や三論

の歌垣の歌からもうかがわれる。云わば三輪の神話はそのような巫女による神祭の場の幻想が生んだものであろう。またこの神話は当時の民衆の間で語られていた昔話の蛇喰入り譚と無縁ではない。三輪氏の歌謡とは三輪神社で歌われた酒宴歌謡三首、海石榴市の歌垣の歌数首である。特にこのうちの歌垣の歌は「雄略記」の赤猪子（三輪の巫女と思われる）の物語作製の核になっている。三輪氏の古伝承の特色は、『古事記』の中で最も古い時代に属すること、従って宣長の強調する「上つ世の清らかなまこと」がこの伝承にみられること、継体朝以前に成文化されており、「帝紀」・「旧辞」の編纂にあたっては由緒ある伝承として採択されたことなどに指摘されよう。

「小子部氏の伝承と一寸法師譚」は本研究の中心論文の一つである。これは雷神信仰の各時代におけるあり方に応じて造型された小子部スガル・道場法師・一寸法師の人間像を追求したもので、具体的には『記紀』と『靈異記』、さらには中世の「小男の草子」・『御伽草子』を結びつけてみようとした。そして古代文学の影響はどの時代までであるのか、古代伝承文学の終焉とはおよそどこに見出すべきかを考えてみた。これはまた古代伝承文学という狭い範囲の研究に没頭していた筆者が中世文学の世界に対して一つの展望を持ちたいという願望のもとに進められたものでもある。さらにこの研究を進めるにあたり、柳田民俗学の成果と、最近盛んである昔話の採訪を利用した。そして結論は柳田民俗学に対する私なりの批判と、例の三者がつまりは説話的人間であることを強調してみた。

第三章の「仏教説話」は『靈異記』についての論文五篇からできている。戦後の『靈異記』の研究は、昭和25年武田祐吉氏による日本古典全書の一つとしての『日本靈異記』の上梓。昭和35年の益田勝実氏の『説話文学と絵巻』の発刊が大きな意味を持っている。特に益田氏の著書に収められている「日本靈異記の方法」はすぐれた論文で『靈異記』に関する基本的問題は大体触れられている。また昭和42年に刊行された遠藤嘉基・春日和男両氏による『日本靈異記』（日本古典文学大系）は校本の作製、本文の訓みと解釈において卓越しておる。しかし『記紀』・『万葉集』さらには平安朝の物語や日記、『今昔物語』などに比して、『靈異記』の研究が立ちおかれていることは誰も認めるところであろう。そのような研究上の空隙を埋め、本格的な研究を打ちだしたいとして始められたのが、以下述べる諸論稿である。私が『靈異記』をよみ、特に興味を持っている問題は、説話の発生とはいかなるものであったのか。誰が説話を作り、誰がその聞き手となったのか。神話と説話はどこが類似し、どの点が相違しているのか。説話の文学性とは何なのか。編者景戒とはいかなる人間であったのか。——等々である。神話は多く族長を中心に氏族伝承という形で語られた。それに対し説話は在地の地方豪族を中心に世間話として話される。族長とは貴族で支配者層に属す。ところが時代の進展とともに奈良時代は被支配者の中から地方豪族が抬頭し、経済力を蓄積し、仏教をとり入れ、私欲拡大の活動を開始した。この新興勢力はもはや閉鎖的な神話・伝説・昔話の世界では満足できず、彼らの世俗的現世的願望を満して

くれる種類の文学を求めた。その切なる願望の結果、生み出されたものが最初の仏教説話集『日本靈異記』である。

「靈異記の文学史的位罫」は最も新しい論文で、これは守屋俊彦氏の労作『日本靈異記の研究』の批判という形で執筆した。私見によれば『記紀』は神話またはその系統の物語とみられる。それに対し世間話を多く集めている『靈異記』は説話である。従来同じ伝承文学に属する神話と説話の違いは明白でなかったが、この両者は区別して考えられるべきである。この両者の違いを説き、『記紀』から『靈異記』への文学史的展開の意義を追求してみたのが本稿である。つまり『靈異記』の編纂とは新しい文学ジャンルの出現であったのである。「靈異記の編者景戒」は、紀伊国名草郡の話の多いことに着目して、景戒の出自、経歴をたずね、且つ彼を養った名草郡の精神的風土を追求した。紀の川河口のデルタ地帯は開発が進み、渡来人も多く、しかも彼らは奈良時代には地方豪族化していた。この地方豪族層から出たのが景戒で、彼は在地で文字と仏教を学び、私度僧の道を進んだ。このような私度僧が民衆に説いた説教とは、超現実的な神話ではなく、現実の生活に根ざす奇異譚や実際にあった面白い世間話であった。そしてまた説教師で説話の話し手でもあった景戒の歴史的位罫づけも考えてみた。その景戒に陰陽師的性格があり、説話好み的一面があることにも触れてみた。「靈異記における類話」は『靈異記』の中に見出される類話を摘出して整理し、類話の多いことは編纂の杜撰によるのではなく、説話の持っている古代的性格、伝承的性格によることを論述した。あわせて『靈異記』の各説話が一冊の説話集としてまとめられる以前に、説教師（私度僧）たちにより各地で民衆に話されていた事情も説明している。「靈異記の道場法師系説話」は『靈異記』におさめられている上巻二縁三縁、中巻四縁二十七縁の話の一つのセットをなした説話群とみなして、この説話群の性格、制作された場所、『靈異記』にもちこまれたプロセス、『靈異記』内における位罫づけなどを考察した。その結果でできた答は、この説話群と明日香の元興寺との特別な関係、この説話の定着者としての景戒、奈良時代末期から平安初期の元興寺が私度僧活動の一拠点であることなどである。これらの見解は今後の『靈異記』研究を展開するにあたり新しい視角を提供するものと思われる。「靈異記の殺牛祭神系説話」は前記論文の方法を踏襲して、主に中巻二十四縁の櫛磐嶋の話を中心に、『靈異記』にみられる殺牛祭神の習俗を背景とした説話を多角的に考察した。そしてこれらの説話群と編者との密接な関係や『靈異記』編纂の問題にも説きおよんでいる。

これを要するに『靈異記』には奈良時代における地方豪族層の進出という歴史的な事象のさなかにその影響を受けながら生みだされたものである。説話とは同じ伝承文学である貴族の神話、農民たちの昔話、在地の伝説とも違う新しい形態の文学で、それは地方豪族たちが、現実の出来事や生活者としての人間に強い関心を持つことにより作りだされた。現実に対する驚きの文学である。そのような文学が景戒の手で文字化され成書化されるにあたって、面白く、写実的になったのが

『靈異記』であると云えよう。このような形態の文学が、やがて和漢混交文により、一層面白い筋を持ち、さらに表現の上で、写実を深めるようになったのが『今昔物語』であるとみられよう。

第四章には「寺社と説話」という題目をつけてみた。ここに所収の論文は主に『靈異記』に源流を発する説話が一定の寺社と結びつきながら、時代の変化とともにどう変容し、どのように定着化したかを追求している。説話文学の研究には唱導を重んじ、唱導と説話を結びつけて考察するという立場がある。ここではその立場も考慮しながらより具体的に一つの寺社と説話を結びつけ、その在地の諸問題との関連の中に説話の生成・伝播・変容などを検討してみた。例を「蟹満寺縁起の源流とその成立」にとると、ここでは説話の考察が南山城の歴史と風土（在地性）との考察と並行して行なわれている。在地性の究明とは伝承文学とその風土的環境との関連の解明である。いかなる種類の文学も風土との関連を持っていると思われるが、説話という伝承性の強い文学はまた特別な仕方では風土との結びつきを示している。ところが風土的環境は歴史を離れては存在しない。つまりここで私が云う在地性とはある一定地域の歴史と風土とを統合したものである。そのような意味での在地性の上に花開いた伝承文学の研究がこの第四章の一貫せるテーマで、同じ問題意識は本研究の全体にも指摘できると思う。

また第四章の執筆にあたって私はできるだけ世に広く流布している説話をとりあげた。そうすることにより説話の面白味、説話の伝播、説話の大衆性などを考えようとした。説話が多衆の心をとらえるためには話自体が面白くなければならぬ。釣鐘の中に隠れた安珍を、蛇に化した清姫が巻いて溶かしてしまうという筋は奇抜にして大胆で面白い。ここにこの話が広く伝播した秘密があるだろう。以上の立場・方法とともに実施調査を重んじている。実施調査は伝承文学の基盤である在地性の究明のためにも大事である。本章の説話の舞台になっている蟹満寺・道成寺・聖神社・当麻寺（並びにその周辺）へは足しげく訪れ、私は在地の山川草木のかけに伝承文学の根強い性格を感じとった。

「蟹満寺縁起の源流とその成立——民話の伝説化——」は一番最初にとり組んだ論文で、バスガイドの説明が契機となり、説話の変遷過程を追求しながら蟹満寺という珍しい名の寺の正体もはっきりさせようとした。その頃私はこのようなテーマについての研究方法を知らず、一人暗中模索した。そのような中で昔話（民話）という得体の知れないものがあることがわかり、関敬吾氏の『日本昔話集成』を読んだりした。蟹満寺縁起の源流にあたる説話は『靈異記』に二つある。いわば本論文は説話と蟹報恩の昔話を結びつけることにより構想されている。伝承文学の一つの特色は、これら説話と昔話、さらには神話・伝説・口碑等の交流であろう。それらがある時は対立してぶつかりあい、ある時はスムーズに一つの流れに統合されたりしながら、一つの寺や神社を中心に定着化される。蟹満寺縁起はそのような流動性の強い典型的な寺院縁起と云えよう。「道成寺説話の特性」は、方法的には前稿を踏襲しながら、この安珍・清姫の話を裏から支えている

熊野信仰に対しても研究のメスを入れた。そして在地の信仰が説話の形成にあたって常に新鮮な活力を提供していることを解明した。しかもまたこの説話の制作者であり伝播者である山伏の実態にも触れてみた。同じく「信太妻の源流と成立」は陰陽道信仰を基盤とする安倍晴明出生譚の考察で、資料としては主として室町時代末期頃から有名になった説経節の「信太妻」を利用した。そしてその出生譚の源流をはるか古代に求め、また晴明の出生譚が、狐を神使としてあがめながら始祖伝説の形でつくられたことを論証した。以上の考察は多分に折口信夫氏の「信太妻の話」に対する批判でもある。「当麻寺と中将姫」はかねて葛城の歴史や風土に関心を持っていたので、調査も研究も比較的スムーズに進んだ。考察を重ねて行くうちに中将姫が実在の人物ではなく、全く伝承の中で事実合うように作りだされた女性であることがわかり、ここにあらためて伝承文学の性格とは何か、説話とは一体何であるかを考えさせられた。その上、当麻には浄土教と一体になった日想観という在地の問題がある。説話は常に話を事実譚として示そうとする性格が強い。また一面形成にあたっては在地の諸問題の影響を受ける。それと同時にここでは一旦形成された説話が、謡曲や小説的構想の物語へ、作りかえられることも論じた。

第五章は「古代伝承文学の意義」で、三輪山伝説を再検討しつつ、『記紀』から『靈異記』への展開を考察し、さらに中世の説話や伝説の世界まで尾を引いている。神と神を斎き祭る巫女の話を追求している。その作業の中で考えられる古代の伝承文学とは一度だけの話として終らぬ根強い伝承性を有し、さらに新しい話し手があらわれると、新しい型の話となり、新しいジャンルの文学となる不思議な生命力を蔵していることを説いている。これは伝承文学（特に説話）が本質的に現実生活の実態から生れているからであろう。説話とは伝承文学の中で主流の位置にあるものとみられる。

論文審査結果の要旨

本論文は、日本古代の氏族伝承と仏教説話及びそれと関連のある中世説話を対象とし、それらの成立・展開と文学的意義について論じたものである。

「第一章 伝承文学研究の立場と方法」では、まず氏族伝承については、史学の成果を利用しつつ資料の綿密な解釈を行うべきであるとし、次に仏教説話については、それを支えた社会的勢力や風土の環境に留意して考察する必要があると述べている。

「第二章 氏族伝承」では、氏族伝承を日本文学の源泉をなすものであるとする見地から『古事記』『日本書紀』を資料として、息長氏の伝承したと見られるオキナガタラシヒメ・ヤマトタケル・衣通郎女などの話、ワニ氏の伝承した建振熊の話、大山守と宇運能和紀郎子についての歌

物語など、三輪氏の伝承した三輪山伝説などを分析して、それらが行動的な明るさを特色とすることを論じ、小子部氏の伝承したスガルなどの話については、中世の説話に及ぼした影響にも言及している。

「第三章 仏教説話」では、『日本霊異記』を取上げて、編者景戒が地方豪族層から出た私度僧の説教師であったことを述べ、類話の多いのは伝承的性格によるものであることを指摘し、特に道場法師系説話と殺牛祭神系説話を詳しく検討して、前者は明日香の元興寺と関係のあること、後者は延暦期の信仰・習俗を背景とすることなどを論じ、本書所収の説話が、総じて地方豪族層の社会的進出を基盤とし、現実性の濃厚なものであることを説明している。

「第四章 寺社と説話」では、主として『日本霊異記』に源を発する諸説話が、特定の寺社と結びつきながら変容し定着した過程とそれらの大衆的な性格を、動物報恩の説話に基づく蟹満寺縁起、愛欲譚を中心とする道成寺説話、陰陽師安倍晴明の出生にかかわる信太妻の話、及び当麻寺と関係ある中将姫の機織の話について、各地域の歴史と風土に関連づけながら追究している。

「第五章 古代伝承文学の意義」では、三輪山伝説・賀茂伝説を検討しつつ、神と神を祭る巫女の話の流れを中世まで跡づけることを通して、古代の伝承文学が、現実生活に深く根ざして強い生命力を蔵していることを明らかにしている。

本論文は、国学・史学・民俗学等の研究成果を批判的に摂取し、実地調査にも基づき、従来の国文学において比較的閑却されていた領域に踏み込んで、新たに開拓したところが多い。推論に幾らか無理な個所も見られ、伝説や説話についての基本的な考え方に未熟なきらいがあり、諸伝承の文学的な意義づけについては更に掘り下げる余地があるけれども、全体として筆者のすぐれた研究能力と学識を示し、伝承文学の研究に多くの寄与をなすものである。

以上の理由によって、本論文の提出者は、文学博士の学位を授与されるに十分な資格を持つ者と認められる。